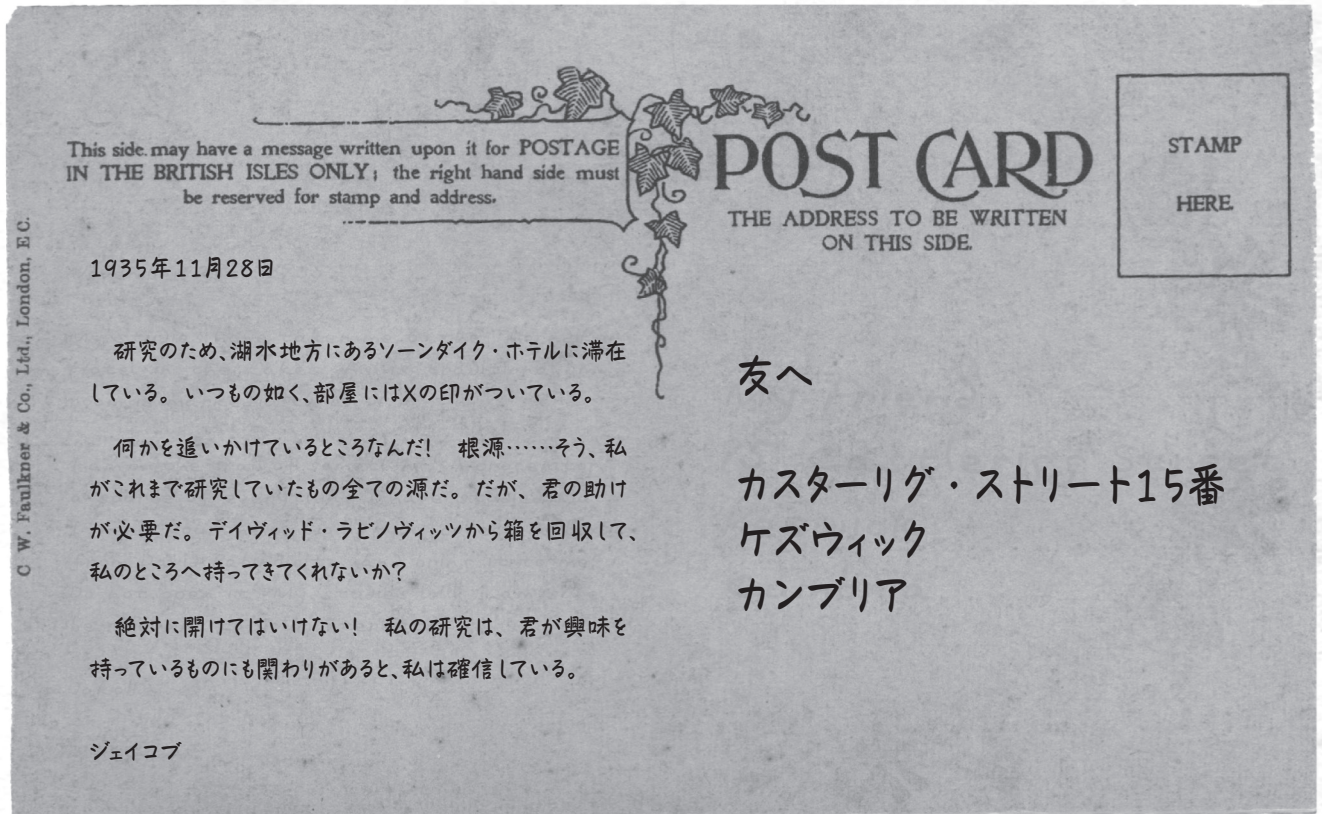


危険な小箱—ハンドアウト

郵便はがき

[このはがき(シナリオへの導入)は、ジェイコブ・タルヴィングから届く。P.116の『導入』を参照]



タルヴィングの民俗動物誌

これらの本(ソーンダイク・ホテルの図書室で見つかる——P.128の『図書室』を参照)は、湖水地方の民間伝承にまつわる奇妙な集積物で、ひとつの動物誌と化している。ある本には、鳥のような生物^{フリーチャー}について詳しく述べている。そいつの肉体は他の動物の部位の寄せ集めで、屋根の上から監視するのだという。また別の本では、地面の下を泳ぎまわる、怪物じみた^{ワニムス}のような種族について詳しく書かれている。

物語については、暗い絶望に満ちている。多くの場合、主人公は怪物によって狂気に落とされるか、さもなければ追いかけ回されている。ある物語では、主人公たち自身が怪物として登場する。

《クトゥルー神話》：この生物^{フリーチャー}たちはより強大なもの、シュブ=ニグラスの^{フレイム}落とし子だ。シュブ=ニグラスは地球の中心で眠りにつき、その乳を大地に染み渡らせている。何本もの触手は地表に向かって伸び、そのひとつは湖水地方に到達している。

『死にゆくセント・マーガレット』

この物語は一人称視点で書かれていて、行方不明となった知人を探す主人公が、湖水地方の沖合にある離島へと赴くところから始まる。主人公は、物語のタイトルにもなっている全寮制の女子高、セント・マーガレット・スクールに就職する。

物語の序盤は、よくある^{ゴーストストーリー}怪談仕立てである。だが、主人公が学校の地下にある古い工房を発見し、そこで知人たちが古代の怪物を研究していたことを発見したところから、雰囲気に変化する。

主人公は知人たちの足取りを追って、学校の地下にある洞窟に足を踏み入れる。そこでは、行方不明になっていた知人が、ぼろぼろに朽ちかけながらも生きていた。結末は、奇妙なほどにあっけない。地下深くで主人公はガス状の怪物を目撃し、静かに発狂するのである。

《クトゥルー神話》：その生物^{フリーチャー}は“色”であり、地球を餌場とするべく星々の世界から降りて来たのだ。文章に秘められた模様は湖水地方の土壌がとりわけ肥沃であり、“色”にとって魅力的なものであることを示している。この地の土壌は、丘の下で眠っているシュブ=ニグラスの乳で満たされているのだ。

懐中電灯を点け、私は工房へと降りていった。そこにはメモや、本や、スケッチや、地図が散らばっていた。彼は、ここにいたのだ! 彼の机があった。私には彼の筆跡がすぐにわかった。

でも、ページをいくらかくっても、書かれていることを理解できなかった。彼は気が狂ってしまっていたのだろうか? 彼は、学校の下に横たわり、レンガや人々から生命を吸い出しているクリーチャーのことを書いていた。寒気のする、異質な、そして不自然なものが降りて……

洞窟を降りていくと、足下の湿った砂が滑った。洞窟は曲がりくねり、ますます深くなっていったが、私は地下に隠された謎を明らかにしたいという衝動に駆られていた。角を曲がったところで、私は彼を見た。

彼は横たわり、弱々しくうめき声をあげ、私に向けて手を伸ばそうとするかのように、その手を痙攣させた。彼は埃に囲まれていて、実体がないように見えた。彼が片手を上げると、その手が崩れた。私が近づくと、空気が乱れ、その手は完全に崩れ落ちた。私は膝をつき、彼の目を見つめた。身動きすることも、触れることもできないまま。

『天空の観察者』

物語の冒頭で、主人公は屋根の上からじっと見つめてくる鳥たちに観察されている。彼女がこの動物を解剖すると、それは他の動物たちの部位から組み立てられているように見える。調査の結果、彼女は湖水地方のとある村に辿り着く。そこの住民は、顔面にチック症状があり、村人全員に同じ症状があった。

彼女はついに、あの生物が^{クリーチャー}廃鉱山にいることを突き止める。彼女は何千もの生物をそこで目にする。その全てがいびつな形状で、他の動物たちの部位から組み立てられている。彼女が降りていくと、生物たちは目を覚まし、彼女は逃亡する。

結末で、主人公は帰宅する。彼女は、自分の夫が村人と同様に顔面のチック症状を患っていることに気がつく。説明しがたい何らかの方法で、彼はあの生物に^{クリーチャー}“感染”していたのだ。

《クトゥルー神話》：この鳥たちは、名前も知性もない^{クリーチャー}生物だ。彼らは地中に眠り、その触手を地上に伸ばしている、大いなる存在の落とし子なのである。触手の1つは、湖水地方に伸びている。鳥の生物は、その存在の小型の分体であり、その無限の繁殖力から枝分かれしたのだ。

天空の観察者

彼女は^{ランタン}角燈を^{とも}点して、鉱山の中に降りていった。最初のうちは、特に目につくものはなかった。やがて、彼女の目の前に、^{クリーチャー}眠っている生物が現れた。彼女を観察していたのと^{クリーチャー}生物と同じ個体だろうか？ それとも、別の^{クリーチャー}生物なのだろうか？^{ランタン}角燈の光を動かすと、たくさんの生物が見えた。全て同じ種類で、全て眠りについていて。ひよとしたら、この中に……

突然、空気がしんと静まった。何か起きたのだろうかかと、彼女は訝った。次の瞬間、彼女は一番近くにいる^{クリーチャー}生物に疑わしげな目を向けた。別の^{クリーチャー}生物から盗み取った目が見開かれ、彼女を観察していた。他の^{クリーチャー}生物に目を向けると、皆が目覚めていた。皆が、彼女を観察していた。

彼らは、彼女に向かって飛んできた。叫び声をあげそうになるのを押し殺しながら、ここまでの道筋をどうにか思い出しつつ、彼女は走り出した。背後で空気が流れるのを感じたが、彼女は振り返らなかった。

『血の舞踏』

この物語では、ある男が湖水地方のリゾート地であるケズウィックに旅行し、そこで自分が養子だったことを知る。彼の実の両親は、近くにあるマネスティ村の出身である。理由は判然としませんが、彼は血を分けたきょうだいたちともケズウィックで出会う。

物語の序盤は、家族の再会と自己発見にまつわる、感動的な物語である。実際、たしかに自己発見はあるのだが、それは常軌を逸したものだ。主人公とそのきょうだいたちは、自分が人の皮を被った怪物であることを発見する。

物語の終盤には、主人公が兄弟を埋葬する儀式が描かれている。これを実行することで、兄弟は土の下にいる同類の怪物の仲間入りをするのだと、この本には(やや説明的な文章が多すぎるのだが)書かれている。

《クトゥルー神話》：このものたちは舞踏者であり、地の底の豊穰なる生物の落とし子であり、従者である。彼らは彼女が特定の意図のもとに生み出した落とし子であり、彼女のお気に入りの子供たちなのだ。彼らの運命は、彼女の鼓動に合わせて浮沈する。彼らは119年ごとに力が強まり、地上にあがってくる。

58

最初は、目にしたものが信じられなかった。写真には、子供の頃の私が写っていた。でも、私を取り囲む家族は、私の知る家族ではなかった。私は、本当はよその子供だったのだろうか？ そうだとしたら、新しい家族は誰なのだろうか？ そうした疑惑を晴らすためにも、私はより多くのことを知らねばならないと心を決めた……

私は、兄弟の肌にナイフを滑らせた。それは驚くほど簡単で、まるで布を切るようだった。その理由はすぐにわかった。緩んだ皮膚の下には、虫のような胴体があったのだ。夢の内容を思い出しながら、私は彼の首と足の裏を切った。そして、彼を墓に押し込むと、その上に土を積み上げた。

舞踏が終わり、太陽が昇ると、私は土の中に手を入れた。兄弟はもう、いなくなっていた。夢で見た世界に行ったとか思えない。兄弟は土の地面の下を泳ぎ、地下にあるものを崇拜しているのだ。いつの日にか、私もその仲間となり、彼女を崇拜するのだろう。

『最後の黙示』(シナリオ『危険な小箱』に追加)

『最後の黙示』を、他の純粹主義シナリオを含むキャンペーンとしてプレイしているなら、『危険な小箱』の第2章で、探索者がタルヴィングの図書室で見つけた書物の中に、この本を含めること。

この『最後の黙示』の物語では、ロンドンのオカルト書店の地下に集まった、問題を抱えた人々のグループにある女性が加わり、彼らが得た奇怪な黙示の意味を理解しようとする。これがきっかけとなり、彼らは筆舌に尽くしがたい脅威にまつわる他の出来事を調査することになる。

秘密を暴いていくことで、彼らは知り得た秘密と一致する形で、自分たちの属する世界が崩壊していることに気づく。彼らは、世界がかつて彼らが認識していたものとは異なっていること、時間そのものが破綻していること、そして彼らが恐怖した怪物によって、世界がすでに破壊されていることをおぼろげに気づき始める。この本は、主人公たちがもはや本当の意味では存在しておらず、想像を絶する異形の中にある、失われた人類の記憶に過ぎない可能性を示唆している。

本の最後の数ページは破り取られていて、どこを探しても見つからない。タルヴィング氏は、この本を入手した時点で既にそのページがなくなっていたことを認めている。

自制心をすっかり失い、私は新聞販売員の手首を掴んで叫んだ。どうしてまだ同じ新聞を売っているのか？ どうしてまだ11月12日なのか？ 彼が手を振り払うと、手首の皮膚が剥がれるのを感じた。新聞が、彼の手中で粉々に砕けた。

私は泣きながら通りに駆け出した。通行人は足を止めて、私の振る舞いに驚いたようだが、助けようとする者は誰もいなかった。皆、私の方を見つめるだけで、目が合うと、それぞれに非人間的な奇形が見られた。

自分が置かれている現実が明らかになった時、私の頭に浮かんだのはただ、死が解放になってくれるという希望のみだった。